

留学生の日本語表現と文化の影響

——イメージ調査と言語表現調査から——

山口和代*

キーワード: 異文化コミュニケーション, ステレオタイプ, 文化的要因, 発話行為, ストラテジー

要旨

人は他国の人々に対してさまざまなイメージを持っているが、それらは往々にしてステレオタイプ的なイメージである場合が多い。このようなイメージが形成される要因には文化、習慣、非言語および言語行動等さまざまなものが考えられるが、その一要因として言語ストラテジーの選択の相違も見逃すわけにはいかない。本研究では中国人留学生および台湾人留学生と日本人母語話者に対して行った記述式調査から、彼らが互いに抱いているイメージと彼らを使用する日本語表現の相違を分析し、考察を行った。

調査の結果、中国人および台湾人留学生の日本人に対するイメージにはある種ほぼ共通したイメージがあるが、一般にほとんど同じかあるいは類似した文化を持つといわれる中国人・台湾人留学生はお互いに抱いているイメージにかなり相違があることがわかった。また、文化によって文脈の持つ意味や、行動や言動を左右する視点の違いがあることが明らかとなり、言語表現には、まず何を重視すべきか、何を伝えるべきかという価値観の相違が大きく影響していると考えられた。

異文化コミュニケーションにおいては意図せずして誤解を招く場合もあり、表面に現れたコミュニケーションスタイルからだけでなく、その背景に社会や文化といった要因が深く関わっているという認識を持った上で相互理解を目指すことが重要だと考える。

1. はじめに

人は他国の人々に対してさまざまなイメージを持っているが、それらの多くは必ずしも妥当なものとはいえない。外国人と接する機会が多い人だからといって、テレビなどのメディアを通してしか接する機会がない人よりも正しいイメージを形成できるわけではない。

留学生や海外からの長期滞在者と接触する頻度が高い日本語教師、また大学院生や教職員も、無意識のうちに自文化の持つ価値観などの意味体系でお互いを理解しようとし、気付かぬうちに

* YAMAGUCHI Kazuyo: 南山大学総合政策学部総合政策学科講師。

心の中にある種のステレオタイプのイメージを形成し、そのため判断に偏りが生じることが少なからずあると思われる。異文化の人々に対するイメージは往々にしてステレオタイプのイメージである場合が多い。このようなイメージが形成される要因には文化、習慣、非言語および言語行動等さまざまなものが考えられ、ただ一つの要因によることは有り得ないが、その一要因として言語ストラテジーの選択の相違も見逃すわけにはいかない。

留学生の日本語表現には言語習得レベル、言語語用論的レベル、社会語用論的レベルなど、複数の異なるレベルの要因が影響すると考えられ、それぞれの要因に関して研究が進められ、成果もあげられている。このうち社会語用論的なレベルの要因は、言語使用への慣習的な事柄やマナー、信念といった文化的なものの影響により生ずるが、知識の習得だけでは解決困難なものも多く、実際にどのような事柄が問題となっているのか、また、どこに問題点があるのかが自覚されないうちに偏見を生み出したり、ある種のイメージを固定化させたりしていることも多い。したがって、留学生のコミュニケーションスタイルの特徴を明らかにし、その背景にある母国文化や社会の影響を探ることが重要となってくるが、統計的な検討を加えるためには、母国文化ごとに十分な資料を収集する必要があるが、量的条件を満たすことが困難な場合が多い。そのため、この種の研究で量的および質的に検討を加えたものはあまりみられない。

本研究では中国人留学生および台湾人留学生と日本人母語話者に対して行った記述式調査から、彼らが互いに抱いているイメージと彼らが使用する日本語表現の相違を量的および質的検討を加えた上で分析し、考察を行う。

2. 調査の対象と方法

調査は1995年(山口1995, 1997ab)と1998年(山口, 近藤1999; 山口2000)に中国人留学生、台湾人留学生、日本人大学院生、日本人社会人の4グループを被調査者として行った。

1995年に行ったアンケート調査では、中国人留学生33人、台湾人留学生17人、日本人大学院生26人、日本人社会人51人の4つのグループを被調査者とし、インタビュー調査はこの中から協力が得られた中国人留学生8人、台湾人留学生9人、日本人大学院生2人、日本人社会人4人に対し、1対1あるいは少人数の面接形式で行った。1998年のアンケート調査では中国人留学生63人、台湾人留学生42人、日本人大学院生39人、日本人社会人65人を被調査者とし、インタビュー調査は中国人留学生5人、台湾人留学生5人、日本人大学院生4人、日本人社会人6人に対し行った。

イメージ調査に関しては、1998年の調査で被調査者各グループの自国人へのイメージとそれぞれのグループへのイメージを探るため、フェイス項目の1項目として被調査者の各グループに対するイメージを形容詞や名詞を5つ以上使って述べてもらったものを資料とし、その集計結果が

10%以上の値を示したものをグループごとにまとめて分析し、考察を行う。

言語表現調査に関しては、1995年と1998年に行った記述式調査を資料の中から異文化間コミュニケーションに際して誤解を誘発する危険性のある要因に焦点を当て考察する。資料の分析に際しては、日本語表現の特徴を明らかにするために、まず談話完成テスト(Discourse Completion Test)¹から得られた各発話行為ごとの発話から発話類型(semantic formulas)を抽出し、意味機能別に分類した。発話類型とは、例えば、人が「断る」という発話行為をするときに使う言葉を、「謝罪」「理由」「代案」等、その意味内容によって分類し、分析の単位としたものである。また、ある種の発話行為で、その目的を達成するために話し手が使う「発話類型の集合」を「ストラテジー(方略)」とし、どの発話類型が先行しているかにより分類した。次に、各発話類型の使用頻度と使用順序に焦点を当て、各グループにみられたストラテジーの相違を比較し、分析を行った。回答中の発話類型やストラテジーの使用頻度の差は、カイ二乗検定を行い統計的有意差を検討した(検定結果は注に示す)。

3. 被調査者各グループの互いへのイメージ

3-1. 日本人に対するイメージ

日本人被調査者の自国人のイメージについては、大学院生と社会人のグループ間で「協調性」や「細かい」など多少差はみられるが、通説通りまじめで勤勉だが、集団主義的であり、曖昧であると考えていることがわかる(図1)。

一方、中国人・台湾人被調査者は日本人に対し、「礼儀正しくまじめだ」と思っているようだが、「曖昧だ」とする割合もそれらと同等もしくはさらに多くの割合を占めている。また、「冷たい」、「裏表がある」といった表現も10%以上、台湾人被調査者に至っては25%前後を示している。日本人被調査者がイメージしているほど「礼儀正しく勤勉で集団主義的だ」とは思っていないことがわかる(図2)。

3-2. 中国人に対するイメージ

次に被調査者各グループの中国人に対するイメージについてだが、各グループ間には差が見られ、日本人グループ間でもいくつか違いが見られる(図3)。

日本人グループ間では、大学院生は中国人を「まじめで親切で礼儀正しいが、率直で強い」と考え、社会人は「まじめで勤勉で質素だ」と捉えている。ただ、身近に中国人留学生が多く、接

¹ Beebe, Takahashi and Uliss-Weltz (1990), 生駒・志村(1993), Olshtain and Weinbach (1993), 橋元(1992), 初鹿野, 熊取谷, 藤森(1996)などの研究を参考に作成した。

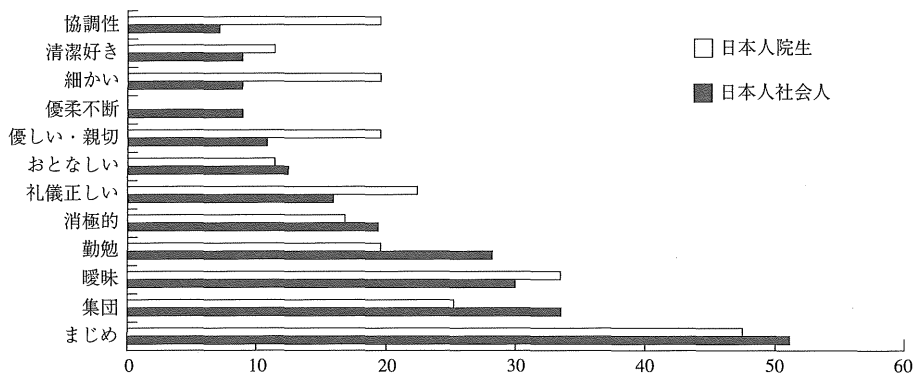


図1 日本人被調査者による日本人のイメージ (%)

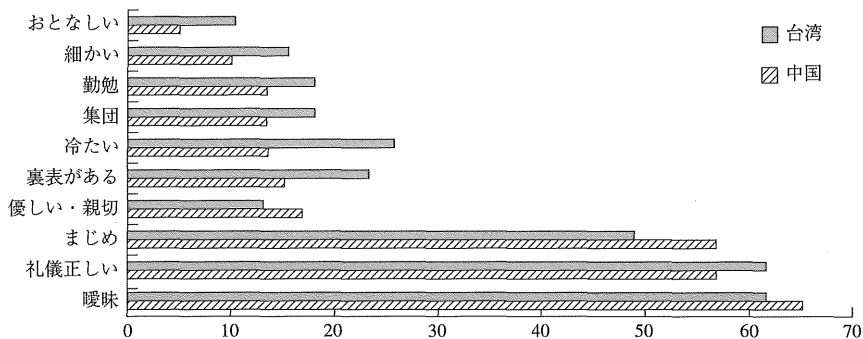


図2 中国人・台湾人被調査者による日本人のイメージ (%)

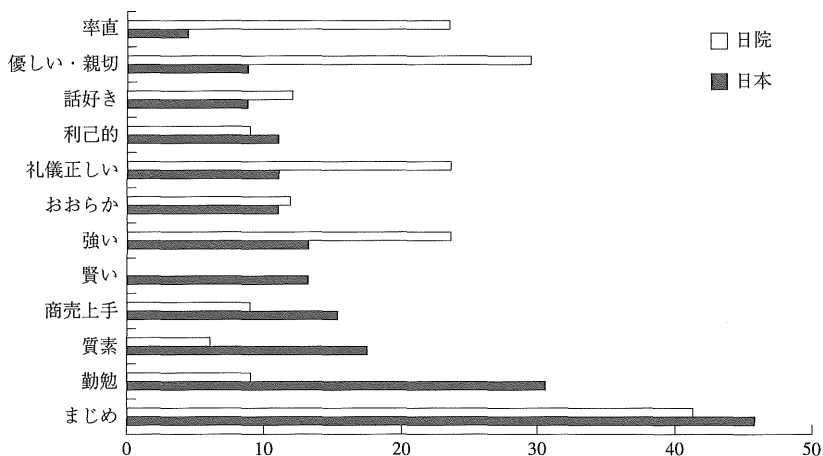


図3 日本人被調査者による中国人のイメージ (%)

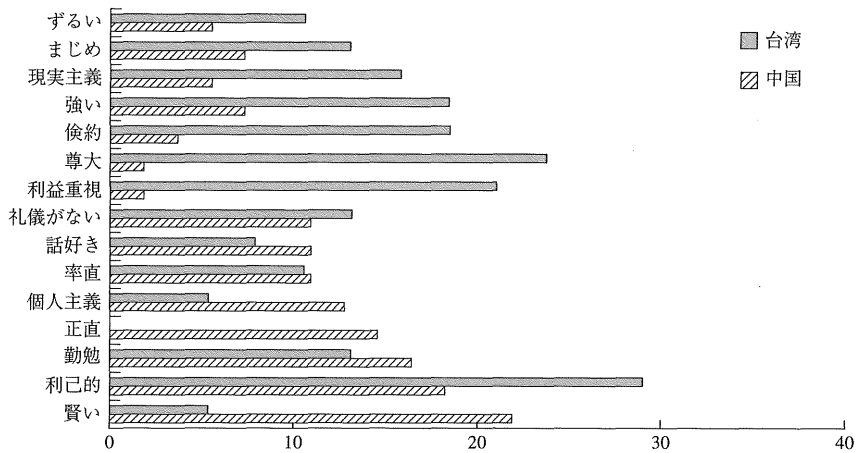


図4 中国人・台湾人被調査者による中国人のイメージ (%)

する機会も多い大学院生と違って、社会人はそのような機会が少ないためか無回答が14%ほど見られ、普通の日本人の意識はこちらに近いであろう。大学院生のほとんどは学友として中国人留学生が身近にいる環境なので、より現実的な印象を持っていると思われるが、その中に「まじめで親切で礼儀正しい」と「率直で強い」というイメージが見られる点は興味深い。この2つは一見矛盾するようなイメージだが、率直に意見を述べ、正しいと思ったことを主張することをよしとする中国人の一面を捉えているといえるだろう。

さて、中国人被調査者は自国人を「賢く勤勉で正直」であるが、「利己的で個人主義」でもあると考えているが、台湾人被調査者は中国人に対し「利己的で尊大で利益重視」であり、「現実主義者で儉約家で強い」とあまりいいイメージを持っていないようだ(図4)。同じ中国語を話す民族であり、同胞と認めあう両国人とはいえ、互いの間には政治的相違や、経済格差など複雑な問題が無視できないものとして存在するのかもしれない。

3-3. 台湾人に対するイメージ

最後に被調査者各グループの台湾人へのイメージについて述べる。台湾人留学生は中国人留学生と比べると数が多いとは言えないが、被調査者である大学院生の周りでもさほど珍しい存在とはいえない。また、社会でも昔から台湾からは多くの人が来日したり、滞在したりしており、正式な国交を樹立した関係国とは言えない政治的事情があるとはいえ、日本にとっては関係の深い国である。それにもかかわらず、被調査者各グループの回答にはおもしろい共通性が見られた。他の国の人に比べ、台湾人に対するイメージに関しては「わからない」あるいは無回答の割合がかなり多かったのである。日本人社会人では36.9%、日本人大学院生では20.5%、中国人被調査

者では29.2%であった。また、中国人被調査者の回答には「中国人だから同じだ。なにが違うのか。」というものもいくつか見られた。インタビューでは、中国人へのイメージに関しては「中国人といっても国は広く、いろいろな人がいるから、決められない。」という一方で、台湾人のイメージに関しては「台湾人は同じ中国人だ。」という場合もあり、この問題は中国人にとっては政治的、教育的背景を持ったなかなか複雑な問題を含んでいると思われ、これが無回答の割合を増やす一因となっているようだ。しかし、日本人社会人の無回答率の高さは何が原因であろうか。ただ単に身近にいる人数が少ないというだけであろうか。これもやはり、台湾の政治的な立場の微妙さを無視して考えるわけにはいかないと思われる。日本人社会人の36.9%という無回答率の高さには「台湾人」へのイメージという問いへのとまどいが現れているのかもしれない。日本人の多くはやはり「台湾人」と「中国人」は中国語を話して漢字を使う、同じ文化を持つ同民族といった程度の認識しか持っていないのであろう。これは何も「台湾人」と「中国人」だけに限らず、欧米人一般に対するイメージについても言えることで、ある意味では外国人一般に対する認識を客観的に育てる土壌を欠いてきた島国的閉鎖性が影響しているのだとも言えるだろう。

さて、では被調査者各グループの印象を見ていこう(図5, 6)。

日本人社会人も日本人大学院生も回答があったものを見ると、台湾人に対しては中国人に対するイメージとはかなり違うものを持っているようである。両グループとも中国人に対しては見られなかった「明るい」というものが一番多く、35%以上を示している。日本人社会人は第2番目に中国人に対するイメージと同様「勤勉」をあげているが、3番目以降には「商売上手」で「元気」で「おおらか」で「強い」と、比較的明るいイメージを表すことばが続く。日本人大学院生の回答は内容的には異なるが、「おおらか」「まじめ」「礼儀正しい」「話し好き」「親切」「気軽

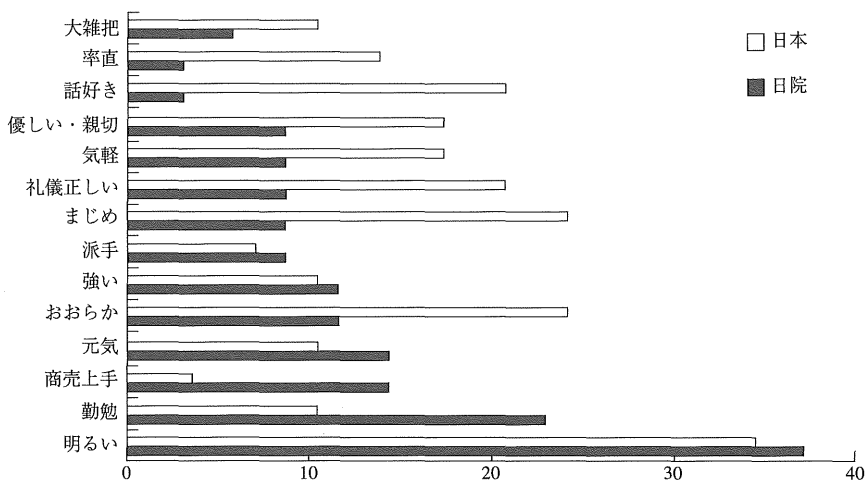


図5 日本人被調査者による台湾人のイメージ (%)

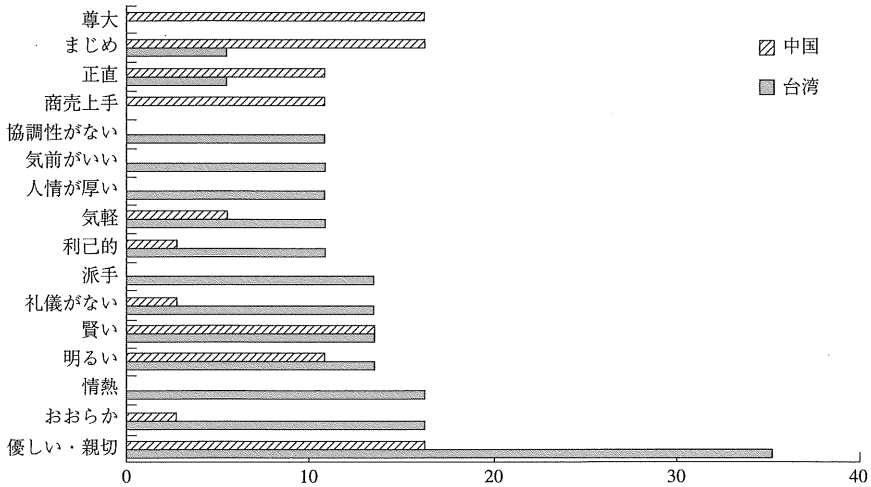


図6 中国人・台湾人被調査者による台湾人のイメージ (%)

「率直」など、やはり明るいイメージのことが多く、「台湾人」と「中国人」は同じ文化を持っていると考える人も決して少なくないであろうが、あらためてイメージを問われた場合の回答結果は多くの人が両者に対し一致したイメージを持ち、同じ中国人だと捉えているわけではないことを示している。

中国人・台湾人被調査者による台湾人のイメージはどうかというと、これも中国人に対するイメージの場合と同様に非常なばらつきが見られる。

中国人被調査者は台湾人に対して「まじめ」で「親切」で「賢く」て「商売上手」で「正直」で「明るい」が、反面「尊大」だというイメージもあるようだ。台湾人が中国人に抱くイメージほど悪くはないが、インタビューでは「お金があるから威張っている」と感じている人も少なくなかったことから、経済的な差についてはかなり敏感なようだ。

台湾人被調査者は自国人に対し、「親切」で「おおらか」で「情熱的」で「明るい」などというイメージの他に、「協調性がない」「礼儀がない」「派手」「利己的」といった負ともいえるイメージも持っているようだ。

3-4. ま と め

以上から、まとめると次のようになる。

日本人に対するイメージに関しては、日本人被調査者と中国人・台湾人被調査者間では異なるイメージを持っているが、どちらのグループも日本人に対しては定型ともいえるある種ほぼ共通したイメージを持っているといえる。一方、一般に中国人も台湾人もお互いにほとんど同じかあ

るいは類似した文化を持つと言われているが、実際には中国人被調査者と台湾人被調査者はお互いが相手に対して持っているイメージと、自分たちに対して抱いているイメージにはかなり開きがある。日本人被調査者間でも中国人あるいは台湾人に対するイメージに違いがあるが、さらに、両グループの台湾人に対するイメージと中国人に対するイメージにもかなりの違いがあることがわかった。

4. では、これらの印象が形成される要因の一つとも考えられる日本語ストラテジーの選択の相違に焦点を当て考察を行いたい。

4. 各グループの日本語表現にみるストラテジー

被調査者のコミュニケーションスタイルは母語によるコミュニケーションスタイルとは当然異なる。コミュニケーションスタイルの相違は言語表現だけではなく非言語表現、あるいは言語行動や態度にも現れるが、本節では被調査者の言語表現の形態をストラテジーに焦点を当てて分析し、その特徴を大きく3タイプに分類して考察する。

なお、本稿で扱った発話行為の相手と内容のまとめを表1に示したが、ここで取り上げた発話行為の番号は表1にある番号である。

表1 本稿で取り上げた発話行為の相手と内容

| No. | 発話行為 | 相手との関係 | 発話行為の内容 |
|-----|------|----------|---------------------------------|
| 1 | 依頼 | 同等・親しい | 授業で発表するレポートの添削を友人に頼む |
| 2 | 依頼 | 同等・親しくない | 教授に頼まれた資料のコピーの手伝いを他の学生に頼む |
| 3 | 依頼 | 目上 | 奨学金応募の推薦書を教授にお願いする |
| 4 | 依頼 | 同等・親しくない | ビデオカメラを貸してもらう |
| 5 | 依頼 | 目上 | アパートの家賃の支払いを大家さんに待ってもらう |
| 6 | 依頼 | 同等・親しい | 友達に貸した1万円を返してもらう |
| 7 | 断り | 同等・親しくない | 先輩からの手伝いの申し出を断る(教授主催の研究会の書類整理) |
| 8 | 断り | 目上 | 教授からの他の人も頼もうかという申し出を断る(教授の資料整理) |
| 9 | 謝り | 目上 | 教授との約束に寝坊して遅れる |
| 10 | 不満表明 | 同等・親しくない | 隣人のステレオの音への苦情 |
| 11 | 不満表明 | 同等・親しい | 待合せ時の友だちの遅刻への苦情 |
| 12 | 不満表明 | 目上 | 先生による成績評価への苦情 |
| 13 | 不満表明 | 同等・親しくない | 道の選択に関する同級生の意見への異論 |
| 14 | 不満表明 | 目上 | 先生の採点ミスへの苦情 |
| 15 | 申し出 | 目上 | 先生に筆記具を貸す |

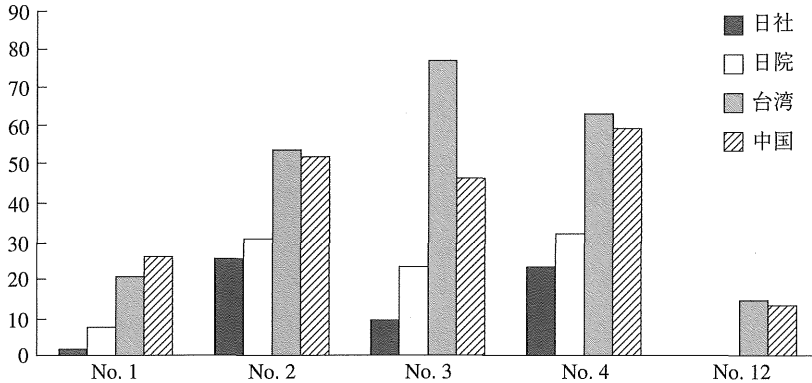


図7 【謝り】先行型ストラテジーの使用頻度 (%)

4-1. 過剰一般化

「過剰一般化」とは学習者が目標言語の使用に際し、言語や言語表現の使用可能範囲を正確に見極め切れず、範囲外の場面でも頻繁に使う現象であるが、これは母語での表現と目標言語でのその相違が大きく、かつ目標言語でよく使われる表現に多くみられる現象である。

「労力・時間の提供を求める依頼場面」(No. 1, 2, 3)と「金品の借用・提供を求める依頼場面」(No. 4)では、中国人被調査者と台湾人被調査者に日本人被調査者よりも【謝り】先行型ストラテジーの使用が多く、「成績評価への不満表明場面」(No. 12)でも多かった(図7)²。【謝り】は必ずしも謝罪を行うためだけに使われるのではなく、呼掛けや軽い感謝の意味にも使われ、表現をやわらげたり、丁寧さを印象づけるのに役立つこともある(小川 1995, 熊取谷 1988, 三宅 1994)。したがって、【謝り】先行型ストラテジーの使用の多さは相手に丁寧に礼儀正しいという印象を与える可能性があり、多くの場合、肯定的印象をもたらす効果があると考えられる。被調査者へのインタビューによると母語ではこれらの場面で謝り表現を使用する必要はないが、日本語の謝り表現である「すみません」は表現を丁寧にする効果があり、非常に便利な表現だと認識しているという。「すみません」の便宜性と有効性に関しては初級のかかなり早い段階で十分な認識が行われる(山口 1995)。このようなストラテジーの使用がイメージ調査の結果から明らかになっ

² 以下に各項目ごとのカイ二乗検定の結果を示す。各グループは日本人社会人を「日社」、日本人大学院生を「日院」、台湾人被調査者を「台湾」、中国人被調査者を「中国」と表記した。以下、日本人グループ間に統計的に差がみられなかったものは「日本」として表記し、一括して検討した。

No. 1: 「日本」vs 「台湾」 $\chi^2 = 3.91$, 「日本」vs 「中国」 $\chi^2 = 9.51$, 各々 $df = 1$, $p < 0.05$

No. 2: 「日本」vs 「台湾」 $\chi^2 = 4.29$, 「日本」vs 「中国」 $\chi^2 = 6.10$, 各々 $df = 1$, $p < 0.05$

No. 3: 「日本」vs 「台湾」 $\chi^2 = 28.32$, 「日本」vs 「中国」 $\chi^2 = 12.43$, 各々 $df = 1$, $p < 0.05$

No. 4: 「日本」vs 「台湾」 $\chi^2 = 10.27$, 「日本」vs 「中国」 $\chi^2 = 12.75$, 各々 $df = 1$, $p < 0.05$

No. 12: 「日本」vs 「台湾」 $\chi^2 = 14.77$, 「日本」vs 「中国」 $\chi^2 = 12.51$, 各々 $df = 1$, $p < 0.05$

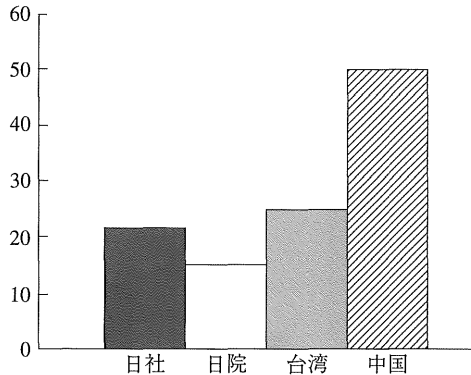


図8 【弁明】(寝坊)の使用頻度 (%)

た「中国人留学生は礼儀正しく丁寧だ」という日本人被調査者の印象の一因になっている可能性がある。

一方、「遅刻に対する謝り場面」(No. 9)では中国人被調査者の使用した【弁明】発話類型に「寝坊」への言及が非常に多く、この場合には失礼な印象を与える危険性があり、中国人被調査者に対する否定的印象を生じかねない(図8)³。インタビューによると母国では「寝坊」を理由とすることは恥ずかしくてできないが、ただ理由は必要なので、自分以外の原因による申し開きを必ず行うということであった。だが、日本の大学では時間通りに授業が始まることはあまりなく、教師自らが「寝坊した」と言うこともあり、日本は「遅刻」に対して厳しくないといった印象をもっている人が多いようである。そのため、必ず理由を言う必要があると考える彼らが「寝坊」に言及するという結果をもたらしたのであろう。

他者に対する印象は習慣の違いや個々人の個性や好みやその場の状況や出来事などさまざまな要因が作り出すものであり、留学生であるがために特殊な要因が存在するわけではない。ただ上述の例からも推測されるように、中国人留学生は場面によって肯定的な印象を持たれたり、反対に否定的な印象を持たれたりする可能性があると思われる。このようなことも聞く人によって留学生への印象がかなり違うという状態をもたらす原因の一つなのかもしれない。

4-2. 母語の干渉(プラグマティック・トランスファー)

「母語の干渉」とは母語の文法や言語表現が目標言語の使用の際に用いられる現象である。

「申し出に対する断り場面」(No. 7, 8)で、中国人被調査者と台湾人被調査者の使用した【結論】先行型ストラテジーに「いいです」という表現の使用が多かった(図9)⁴。

³ 「日本」 vs 「中国」 $\chi^2=9.97$, 各々 $df=1$, $p<0.05$

⁴ 「同疎」: 「日本」 vs 「台湾」 $\chi^2=5.79$, 「日本」 vs 「中国」 $\chi^2=6.51$, 各々 $df=1$, $p<0.05$

「目上」: 「日本」 vs 「台湾」 $\chi^2=7.47$, 「日本」 vs 「中国」 $\chi^2=9.74$, 各々 $df=1$, $p<0.05$

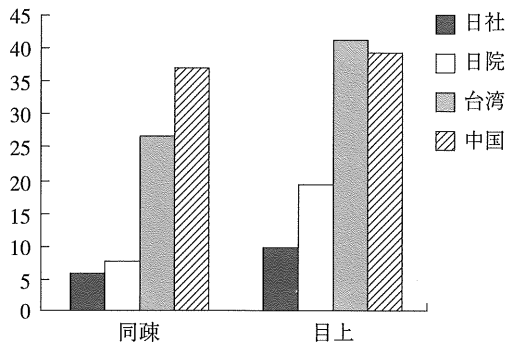


図9 【結論】(いいです)の使用頻度 (%)

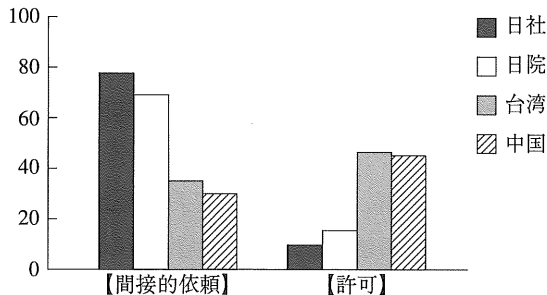


図10 【間接的依頼】と【許可】の使用頻度 (%)

この表現は日本人被調査者が使用した「たいじょうぶです」という表現と比べると、イントネーションや語気によっては「きつい」調子に聞こえる危険性がある。これは中国語で「不用了(その必要はない)」が断り表現として使われるため、日本語学習者が学習初期に日本語の断り表現の代表的なものとして「いいです」や丁寧な表現として「結構です」を学ぶことにも原因があると思われる。インタビューでは、日本語を大学で専攻している大学院生でも「たいじょうぶです」が、「心配には及ばない」と相手の配慮に対して応答し、間接的に断りの意味を伝えるものだとまでは理解していないようであった(山口 1995)。このようなストラテジーの使用が「中国人留学生は率直で強い」という印象になることもあるだろう。

「金品の借用・提供を求める依頼場面」(No. 5)で、中国人被調査者と台湾人被調査者は「支払いの延期」の依頼の際に日本人被調査者にはほとんどみられない【許可】発話類型の使用が多かった(図10)⁵。

⁵ 【間接的依頼】: 「日本」vs「台湾」 $\chi^2=10.27$, 「日本」vs「中国」 $\chi^2=19.84$, 各々df=1, $p<0.05$
 【許可】: 「日本」vs「台湾」 $\chi^2=11.76$, 「日本」vs「中国」 $\chi^2=15.44$, 各々df=1, $p<0.05$

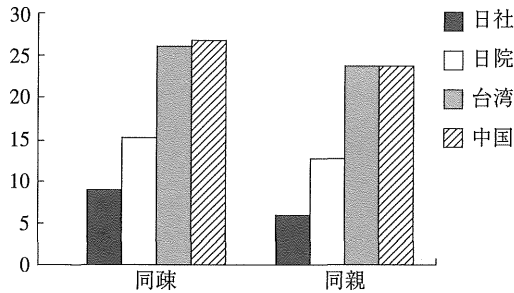


図 11 【弁明】先行型と【質問】先行型ストラテジーの使用頻度 (%)

中国人被調査者と台湾人被調査者へのインタビューによると、中国語での丁寧な依頼表現は日本語表現の「～でもいいですか」、あるいは「～します。よろしいですか」に相当するようで、【間接依頼】発話類型である「～していただけませんか」とは丁寧度に差があり、区別して使う必要があるとは考えていなかったという。この場面での【許可】発話類型の使用は失礼な印象を与えかねない。

また、「騒音への不満表明場面」(No. 10)では、中国人被調査者と台湾人被調査者は日本人被調査者と比べて【弁明】ストラテジーの使用が多く、「遅刻への不満表明場面」(No. 11)では【質問】ストラテジーの使用が多かった(図 11)⁶。

インタビューによると中国語でも同様のストラテジーを使用することが多いという。前者は自分の行為の妥当性を高めるため、後者は相手の立場を明確にするために積極的に働きかけるものであるが、日本人被調査者の使用したストラテジーと比べ、強い印象を与える危険性がある。

「採点ミスへの不満表明場面」(No. 14)では台湾人被調査者に【断定】発話類型の使用が多い(図 12)⁷、「道の選択への不満表明場面」(No. 13)では中国人被調査者に【婉曲】発話類型の使用が少なく、【断定】と【弁明】の発話類型の使用が多い(図 13)⁸。はっきりと異議を唱える【断定】や意見の妥当性を説明する【弁明】の使用の多さは強い印象を与えるだろう。

4-3. 母国文化の規範や価値観による制約・干渉

言語表現は文法等の制約を大きく受けるが、文法的に問題がない場合でも、文化の規範やその文化に存在する制約から逃れることはできず、それに反した言語表現は不自然なものと判断され

⁶ 【弁明】先行型: 「日本」vs 「台湾」 $\chi^2=4.84$, 「日本」vs 「中国」 $\chi^2=6.52$, 各々 $df=1$, $p<0.05$

【質問】先行型: 「日本」vs 「台湾」 $\chi^2=6.07$, 「日本」vs 「中国」 $\chi^2=8.93$, 各々 $df=1$, $p<0.05$

⁷ No. 14 【断定】: 「日本」vs 「台湾」 $\chi^2=5.89$, $df=1$, $p<0.05$

⁸ 【婉曲】: 「日本」vs 「中国」 $\chi^2=8.54$, $df=1$, $p<0.05$

【断定】: 「日本」vs 「中国」 $\chi^2=5.00$, $df=1$, $p<0.05$

【弁明】: 「日本」vs 「中国」 $\chi^2=12.11$, $df=1$, $p<0.05$

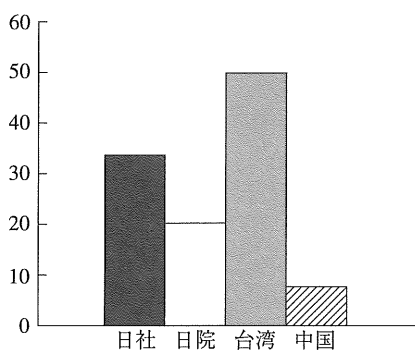


図 12 【断定】の使用頻度 (%)

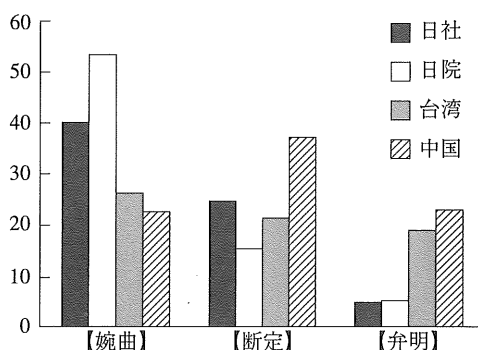


図 13 【婉曲】・【断定】・【弁明】の使用頻度 (%)

る。

3. の「母語の干渉」で取り上げた「支払い延期依頼場面」(No. 5)での【許可】発話類型の多用には母国文化が持つ価値観の影響も推測される(図 10)。中国人被調査者と台湾人被調査者へのインタビューで、「払うべきものが払えない」のに「(待って)とお願いする」のは失礼であり、そのような権限はない。延期させるか否かは相手が決めることなので許可を得るべきではないか、という意見があった。この場面では相手の権利あるいは相手の領域への侵害、つまり「権限」に対する配慮が重視されたのではと推測された。

また、「採点ミスへの不満表明場面」(No. 14)での台湾人被調査者の【断定】発話類型の使用の多さと(図 12)、「道の選択への不満表明場面」(No. 13)での中国人被調査者の【断定】と【弁明】の発話類型の使用の多さに関しても(図 13)、インタビューでは、間違いははっきりと教えてあげたほうが親切であるし、正しいと思ったことは相手にはっきり説明すべきだという意見が多かった。

これら 3 場面での言語表現はいずれも自己主張がはっきりしているという印象を日本人に与える危険性を含むものである。

犬田(『現代のエスプリ』1980: p. 48)は個人主義社会のように「誰もが違ったことをしてもよいし、またする社会でこそ、社会の統合を維持するために、権利と義務を明確に定めておく」ことが必要だが、日本のような集団主義社会では「権利ということで他人と違う行動をすることを言いたてる必要は原理的にない。また義務で行動をしぼり、しばられることもない」ので、「権利・義務のセンスは、日本人にはほとんどない」という。日本では自分の「権利」や「領域」を主張することを良しとしない風潮がいまだに見られ、「権利」や「領域」を主張することに何故か後ろめたさを感じる人が多い。それゆえに他者の「権利」や「領域」に対してもあまり敏感に反応しないし、各人が立場を明確にして意見を主張することも苦手である。このことから、中国

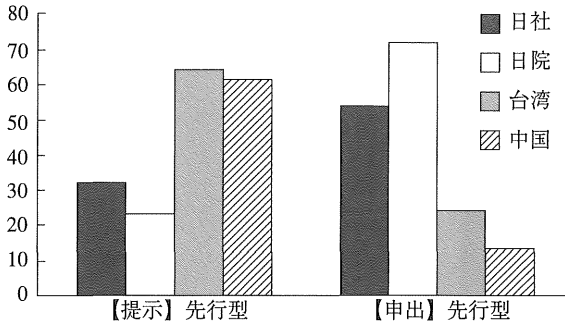


図 14 【提示】先行型と【申出】先行型ストラテジーの使用頻度 (%)

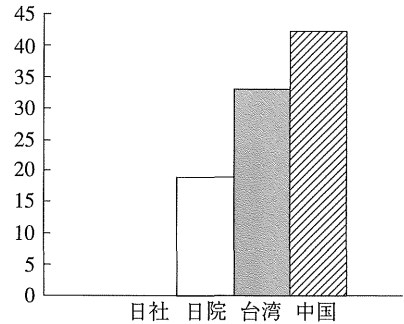


図 15 【曖昧】の使用頻度 (%)

人・台湾人留学生の自己主張の強さは必ずしも好意的に受けとられるとはいえない危険性が示唆されるが、イメージ調査の結果に中国人や台湾人への印象の中に「強い」「率直」という表現が見られたことにもうなづけるものがある。

また、「申し出場面」(No. 15)で、相手に筆記具を貸す際に中国人・台湾人被調査者は「あります」と提示する回答が65%近く、日本人被調査者は「これをどうぞ」あるいは「これを使ってください」と申し出る形の回答の方が多い(図 14)⁹。このような相違は些細なことであり、さほど問題になることはないだろうが、ただ「あります」と提示しただけでは態度や表情等によっておしつけない印象を与える危険性もあり、このような些細な印象の積み重ねがステレオタイプの形成につながるとも考えられ、あながち軽視するわけにもいかない。

以上、中国人および台湾人被調査者の日本語表現に焦点を当て、異文化間コミュニケーションに際して誤解を誘発する危険性のある要因に焦点を当て考察を行ったが、これらのストラテジーの相違は逆にいえば、留学生が日本人に対して抱くステレオタイプの形成要因となる危険性を内包しているともいえる。

「友人に借金の返済を迫る場面」(No. 6)で中国人被調査者と台湾人被調査者に曖昧な表現が目立ち、はっきりと返済を求めない被調査者が多かった(図 15)。どのグループにとっても「返金の催促」は容易ではないと思われるが、特に「中国」は「曖昧」な表現によるストラテジーの使用頻度が40%以上あったので、「返金の催促」に対する抵抗がきわめて強いのではないかと考えられる¹⁰。

インタビューでは、「相手を信頼してお金を貸したのに催促したら相手を信頼していないことになり、相手の面子を傷つけてしまう」という答えが特に中国人被調査者に多かった。このことか

⁹ 【提示】先行型: 「日本」vs「台湾」 $\chi^2=15.79$, 「日本」vs「中国」 $\chi^2=16.91$, 各々 $df=1$, $p<0.05$

【申出】先行型: 「日本」vs「台湾」 $\chi^2=16.18$, 「日本」vs「中国」 $\chi^2=36.07$, 各々 $df=1$, $p<0.05$

¹⁰ 「日社」vs「中国」 $\chi^2=25.17$, $df=1$, $p<0.05$, 「日院」vs「中国」 $\chi^2=3.25$, $df=1$, $0.1>p>0.05$

ら、たとえ軽い調子であろうと借りたお金を返すようにと日本人から数回言われた場合、信用されていないのだと感じ、反対に日本人に対し不信感を抱くようになる危険性があると推測される。このようなストラテジーの相違が、3. で見られた中国人・台湾人被調査者の日本人への「冷たい」「裏表がある」といった印象をもたらす一因となると考えられる。

また、「道の選択への不満表明場面」(No. 13)で日本人に【婉曲】の使用が多かったが(図 13)、留学生が日本人のこのような遠回しの言い方や煮え切らない曖昧な態度から自分の意見に自信がないのではと考えることもあるだろう。

さらに、調査中インタビューを行っている際に次のようなエピソードを聞いた。日本人は誘いを断る際に本当は行きたくない場合でも、しばしば「行きたいんだけど…」と前置きしてから断ろうとする。中国人や台湾人はこのような表現は前向きの姿勢を示すものであり、つまり、何とか都合を付けて来てくれるのだという期待を抱かせる表現だと解釈する。これは実際にあった話だそうだが、旅行の集合場所で日本人をずっと待っていて裏切られたと思い、なんと不誠実なのだろうと腹を立てたという。日本人にとってははっきりと「行けない」あるいは「行かない」というのは相手を傷つけ失礼になると配慮したつもり表現が相手によっては不誠実だという印象を持たれる結果となる場合もあり、イメージ調査の結果にみられたように日本人には「本音」と「建前」があり信用できないというステレオタイプにつながることもあるだろう。

上述のように、文化によって文脈の持つ意味や行動や言動を左右する視点に違いがあることは明らかであり、それは言語習得が進み、日常生活に支障がないほどの語学力を獲得したと思われる場合でもなかなか完全に克服できる問題ではない。言語表現には、まず何を重視すべきか、何を伝えるべきかという価値観の相違が大きく影響していると考えられるので、非母語話者も母語話者も、異文化コミュニケーションにおいては意図せずして誤解を招く場合もあるのだと十分認識することが重要である。

5. おわりに

同じ集団主義社会と言われる中国や台湾では日本人よりもむしろ自分の「権利」や「領域」に敏感だという報告もあり(山口 1997a, b)、本稿で行った考察からもわかるように、集団主義社会と中国、台湾、日本をひとくくりにはできない。一般に強い主張を好まないとされる日本人が自分の意思を明確に伝えるコミュニケーションストラテジーを敬遠したとしても不思議はない。中国・台湾・日本は一見集団主義に基づいた同文化と見なされがちであるがゆえに、その背後に潜むさまざまな差異を見逃してしまうこともままあるであろう。したがって、思いがけないところに潜む文化差によって相手に否定的な感情を抱いてしまうこともあると推察される。

本稿で示したように、留学生のコミュニケーションスタイルは、ある場面では印象をよくする

ストラテジーとなったり、別の場面では逆に敬遠される危険性のあるストラテジーとなったりすることがある。これらは自分で自覚することは難しく、さらに実態調査を進め、日本語教育の中に積極的に取り入れていくことが必要だろう。

外国語の習得にはさまざまな要因が影響するが、今回の調査結果からも特に文化的要因の影響は無視することはできないものだという事は明らかである。したがって、会話や日本事情あるいは作文といった授業で日本語の技術や知識を習得させるだけではなく、文化的な背景に視点をおくことにより、異なる物の見方や価値観の存在を留学生に気づかせることが重要である。

上述したことは日本語を学ぶ留学生だけではなく教える側の日本語教師や留学生を支える人々にとっても必要なことである。例えば、日本語教師は留学生の言語習得および文化理解を促進するために、さまざまな工夫を行い、経験を積み、公平な視点を持つと心がけ授業に臨んでいるであろうが、さまざまな場面で学生を評価するに際して、日常の業務に追われ、いかんせん気づかぬうちにステレオタイプの判断に陥っていることもあるだろう。あるいは反対に、教師の言動や行動が留学生に誤解を与え、日本人や日本文化に対するステレオタイプの形成を促すことになっているかもしれない。

留学生だけに日本文化や言語表現についての学習を求めるのではなく、彼らと接する機会のある人すべてが、表面に現れたコミュニケーションスタイルからだけではなく、その背景に社会システムや文化といった要因が深く関わっているという認識を持った上で留学生と接することが重要だと考える。

参 考 文 献

- 生駒知子, 志村明彦(1993) 「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー: 「断り」という発話行為について」『日本語教育』79, 41-52, 日本語教育学会。
- 犬田 充(1980) 「日本的集団主義の特性」, 浜口恵俊編『現代のエスプリ』160, 42-55, 至文堂。
- 小川治子(1995) 「感謝と詫びの定式表現——母語話者の使用実態の調査からの分析」『日本語教育』85, 38-52, 日本語教育学会。
- 熊取谷哲男(1988) 「発話行為理論と談話行動から見た日本語の「詫び」と「感謝」」『広島大学教育学部紀要』第2部, 37, 223-234, 広島大学教育学部。
- 橋元良明・異文化コミュニケーション研究会'91(1992) 「婉曲的コミュニケーション方略の異文化間比較——9言語比較調査」『東京大学社会情報研究所調査研究紀要』1, 107-159, 東京大学社会情報研究所。
- 初鹿野阿れ, 熊取谷哲夫, 藤森弘子(1996) 「不満表明ストラテジーの使用傾向——日本語母語話者と日本語学習者の比較」『日本語教育』88, 125-139, 日本語教育学会。
- 三宅和子(1994) 「「詫び」以外で使われる詫び表現——その多用化の実態とウチ・ソト・ヨソの関係」『日本語教育』82, 134-146, 日本語教育学会。
- 山口和代(1995) 「留学生の日本語表現とコミュニケーション・スタイル——中国人および台湾人留学生の社会文化的要因を中心として」, 名古屋大学大学院国際開発研究科修士論文。
- (1997a) 「留学生の発話行為と文化的要因に関する一考察——中国人台湾人留学生を対象として」『異文化間教育』11, 125-140, アカデミア出版会。

- (1997b) 「コミュニケーション・スタイルと社会文化的要因——中国人台湾人留学生を対象として」『日本語教育』93, 38-48, 日本語教育学会.
- (2000) 「留学生の日本語と文化習得——言語表現への文化の影響」『南山大学国際教育センター紀要』1, 139-154, 南山大学国際教育センター.
- 山口和代, 近藤祐一 (1999) 「日本語習得と文化理解——中国人および台湾人留学生の日本語表現にみる文化的要因」『アカデミア』67, 217-233, 南山大学, 文学・語学編.

Beebe, Leslie M., Tomoko Takahashi, and Robin Uliss-Weltz. 1990. Pragmatic transfer in EFL refusals. In *Developing communicative competence in a second language*, eds. R. C. Scarcella, E. S. Andersen, and S. D. Krashen. New York: Newbury House, 55-73.

Olshtain, E. and L. Weinbach. 1993. Interlanguage features of the speech act of complaining. In *Interlanguage Pragmatics*, eds. G. Kasper and S. Blum-Kulka. New York, NY: Oxford University Press, 108-122.